翻訳

ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト=ファン・デル・スカーク

『炎は燃え続ける』

内田　博*

解題

以下に翻訳するのは、オランダ・マルクス主義の代表者のひとりにして、詩人としても高名なヘンリエッテ・ローラント・ホルストの自伝 Het vuur brandde voort である。初版は、1949 年にアムステルダムで出版されたが、訳出にあたって底本としたのは、ローラント・ホルストの遺稿による増補第 3 版（1979 年刊）である。本書を翻訳することにしたのは、19 世紀の末から第 2 次大戦の時期におけるオランダの社会運動、芸術運動の歴史、およびその時代の女性知識人の生き方を理解するうえで、参考になると考えたからである。

今回翻訳するのは、第 1 章「1869 ～ 1896 年」の第 1 節「子どもの頃」と第 2 節「寄宿女学校の頃」の前半である。注は、すべて訳注である。

第 1 章 1869 ～ 1896 年

第 1 節子どもの頃[*1]

いちばん小さかった頃の記憶は、うれしいものではないが、私には誇らしいものであった。日曜日のことである。乳母が新しいブーツを履かせようとしたが、私はそれに興味がなかった。おとなしく履かせてもらうのがいやで、激しくあばれた。母がいそいで駆けつけるまで、足をばたばたさせて、泣き叫んでいた。

「やめなさい。行儀の悪い。」といって、母は私を捕まえ、薄暗いおもちゃ箱に閉じこめた。私がすすり泣きながら、「よいこにします。本当によい子にします。」といっても、母は許してくれなかった。私は、日曜日の長い間、薄暗い箱

＊藤女子大学人間生活学部教授

*1 ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト・ファン・デル・スカークは、1869 年 12 月 24 日に、公証人テオドール・ファン・デル・スカークとアンナ・ファン・デル・スカーク・ファン・デル・フーヴェンの子として、オランダ南部のノールドヴェイクに生まれた。

で過ごした。

お茶の時間になっても、気むずかしい士官候補生のような母は、何もくれなかったが、娘に同情した父が、鶏ももの料理を私にくれた。

もうひとつ覚えているのは、私が、寝室のベッドに入って寝ようとしているときのことである。乳母が大きな楕円形のテーブルにすわって、私にお話をしてくれる。乳母は何度も立ち上がって私のベッドのカーテンを開け、身をかがめて、私が寝ついたかどうか調べていた。寝ていなければ叱られた。寝なさいという声が聞こてくるのだから、もちろん眠ることはできない。汗をびっしょりかきながら、私は暴君が寝てしまうまで、じっとしていた。それから私は思いきって体を動かし、右向きになってゆっくりと眠った。

明るい思い出も二つある。ダブルベッドで両親の間に寝ているとき、私は最初の詩を作った。このようなものである。

かわいそうな子ども
誰にも愛されず
誰にも憎まれ
街をさまよう

どうして、こんな哀れな情景が頭に浮かんだのか？それは分からない。こうした情景の話を聞いたことはなかったし、また私はまだ読み書きができなかった。しかし思い出すのは、言葉が韻を踏んでいるが愉快だったということである。[*1]

しばらく後になって - たぶん、少なくとも 1 年以上あとに - 再び詩が頭に浮かんできた。今度のは、むしろえらそうなものであった。

古い城では時はゆっくりと這い広がる
ときには一日が一週間も一月も続く
蔦が壁にそって揺れ
壁石が鈍い音[klang]をたてて落ちる

この詩の klang という言葉は、私の初めてのドイツ語なまりであった。[*2] 残念

---

*1 詩の原文は、以下の通りである。
Het arme kind
door niemand bemind,
door iederen gehaat
zwierf zij over straat.
このように、ｄｄｔｔが韻を踏んでいる。
*2klang はオランダ語では正確には klank と表記する。

ながら、ドイツ語なまりは、これが最後ではなかったが。当時の私は、夜中にベッドで起きているのがロマンチックだと思っていた。そのためにベッドのすそに背中をまっすぐ伸ばして腰掛けていた。しかし、この詩を作ったときには、こう考えた。「こんなに美しいものを作れば、誰でもひとりでに目が覚める」と。

このとき私は、はじめて文学的思い上がりに襲われたわけである。幸運にも私はのちに、詩才はひとつの天賦の才能であって、それについては、筋肉が強いとか目がよいとかいったことと同じ程度にしか自慢できるものではないことを、しかし同様に、その才能を純粋に保持し、発展させ深めることもできるということを、理解した。それゆえにまた、才能には責任が伴うということも分かった。私は、子ども時代のこのときから、折ある毎に詩を作っていた。例えば難破船に関するフランス語の長い詩である。難破船のように消えてなくなってしまうものも、文学にとっては無ではないのである。

私の父は、ノールドヴェイクの公証人であった。ノールドヴェイクは、海岸から30分ほど離れたところにあり、球根畑に囲まれた花の多い村であった。

父のことで子どもの頃から覚えているのは、稀に見る男性的な美しさである。父は、頭の形が貴族的で、小さい落ちくぼんだ眼の色は黒っぽく、鼻は鷲鼻で、唇の形は美しく肉感的であり、みずみずしい顔色をしていた。そのうえ肩幅も広く、頑健な体格をしていた。声は美しいバリトンであった。よく泊まりに来ていた音楽好きな姪と一緒に、「アンゴー婦人」*1 - 当時好まれたオペレッタ - の二重唱曲をはつらつと唄ったものだ。父は気分屋であったかもしれないが、不機嫌なときでも、誰よりも愛すべき人物であった。だから、いうまでもなく女性に対して強い魅力を発していた。その魅力は誰にでも発揮された。しかし父は、全身全霊を込めて母を慕っていた。父の先祖はスキダムの都市貴族であり、ジュネヴァ・ジン醸造業や工場経営を生業としていた。しかし、父は生まれながらの貴族であったので、醜くみすぼらしいこの小都市よりも農村を選んだ。学位論文にも、普通なら「スキダム生まれ」と出生地を書くところを、「ノールドヴェイクの」と居住地を書いたほどである。

父には、美と秩序に対する本能的な欲求があった。規則正しい筆跡は、上品で優美であり、手紙の宛名書きさえ洗練されていて、見るのが楽しいほどであった。私は、たぶん成人した頃、父の生まれた都市を訪ねたことがある。そのために、左に地名、右に街区名を書いた住所録を作った。それを見ていた父は、怒って、それを私の手からもぎ取った。私は、住所録をきれいに書き直さねばならなかった。

正真正銘の貴族として、父は、顧客である農民や球根栽培業者といった関係者にも、事務所の職員や、家の使用人たち（御者兼従者一名、庭師一名とその弟子一名、二名後には三名の家政婦）に対しても、いつも礼儀正しく、親切であった。

---

*1 正確なタイトルは、「アンゴー婦人の娘」。

父は気前がよく、今から60ないし70年前に、勤めている者たちの全員に高い給与を支払っていた。

父は、ギムナジウムで当然英語とドイツ語を学んでいたが、私は父がフランスの小説以外を読んでいるのを見たことがない。父がもっとも好んだのは、庭園と、よく調教された見事な馬たちであった。本当は神経質なのに馬になると話は別で、御者台に乗って馬を見事に御していた。

父は、いつもポケットナイフと古い手袋を身につけていて、芝生で雑草のタンポポを見つけると、それを使って切り取っていた。これが男の典型である。

私の祖父母であるファン・デル・スカークには、私は会ったことがない。祖母のファン・デル・スカークは、詩が好きで、ドイツ語の多くの詩を暗記していたようである。

父には、十歳年上の兄と十一歳年上の姉がいた。「ジャックおじさん」は、若いときにはきわめて急進的で、理想主義者であった。失恋して、「オランダ領インド」*1 にいってしまった。彼は、そこでルンバン総督に出世し、本物の皮肉屋になった。当時の総督は、その地域におけるある種の絶対権力者であり、その権力を緩和できるのはアダート*2 だけであった。

ジャックおじさんは、「政府の詳細な証拠調べ」に基づいて、ルンバンで犯罪者を絞首刑にした様子を、何度も生き生きと話してくれた。

私の反抗的気質は早くに現れていたので、こうしたおじさんの話は私の血を沸騰させた。私の怒りに対する静かな同盟者は、徹底的に民主主義的に考え感じる私の母であった。

おじは女性には敬意を払わなかったので、私は、おじが冬のパリでいわゆる「お楽しみ」をしようとしても、貞淑な女性とはおつきあいできなかったのではないかと想像していた。ただ例外はあるもので、それが私の母に対する態度であった。母に対しては、おじは、友情や尊敬以上の態度で接していた。それは本物の畏怖であり、母がそばにいると不穏当なことは話さなかった。

休暇のあいだ、おじはよく一週間ほど泊まりに来た。おじがリューマチにかかったときは、一週間が一月に伸びた。さて、食卓の保守主義とは、精神的なものではないし、高級なものでもない。父もおじも美食家で、食卓では上質のグラス・ワインを手放さなかった。とくに父は、それ以外では控えめなひとであったのに。父は、同世代のほとんどのひととは違って、ビター入りのジンを飲まなかった。しかし、料理は、食卓の会話よりも酒飲みの好物を優先したものだった。そのほかの可能性はなかった。それは、おじが一緒に「一儲けしよう」（投機で運良く金持ちになるという意味）といったときも、同様であった。投機は本当にうまくいったようだ。実際、父もおじも死後にかなりの財産を残していた。父は実

---

*1 この場合は、オランダ領東インドのことである。

*2 非国家法である慣習法や不文律のこと。

際には公証人としてより多くの利益を得ていたし、スキダムの裕福な親戚の遺産を何回か相続していた。この親戚については、また述べることにする。

父の姉は、若い頃美人であった。このおばは平民出身の牧師と結婚したが、この牧師は、努力の末、のちに、オランダ最大の自由主義的日刊紙の編集長になった。二人には一人息子がいて、法学を学んだが、音楽にも才能があり、ピアノがうまかった。子どもの頃、私は、L おばさん夫妻のところに泊まったことがある。おばのところでは、いとこが家にいれば、二階の勉強部屋で一緒に遊んだ。そこには『週間ユーモア新聞』のバックナンバーが山積みになっていて、私は何時間も、ちょっとおもしろい話や冗談を楽しんだり、いとこのピアノ演奏を喜んで聴いたりしていた。二階は居間よりも居心地がよかった。おばは、極端にきれい好きで、足跡の汚れの一つ一つを毎日きれいに掃除しなければおさまらなかった。おばの朝の日課は、インコやそのほかの鳥の鳥かごを掃除することであった。私には、とくに緑のインコと文鳥がきれいだった。

ある朝、義理のおじが、自分が勤める編集部に私を連れて行ってくれたことがある。そこで私は、新聞を印刷する大きな機械を見せてもらった。おじはまた、時間を割いて、外交の話もしてくれた。1880 年のブーア戦争は子どもの私には大昔の話だったが、1881 年にイギリスがアレキサンドリアを占領し、アラブのパシャたちが捕らえられたり追放されたときには、私はおじと一緒に激しく反英的になった。

私の母は、優秀な知識人の家系に生まれたひとである。彼女の父親は、工兵隊の将校で王立陸軍士官学校の教官でもあった。ブレダ要塞史を執筆したのが彼である。[*1] 母方のこの祖父にも、私は面識がない。しかし、母方の祖母や母の話で、私は、祖父の生き生きとした姿を思い浮かべることができる。祖父は、ユーモアにあふれるとともに、毅然とした性格の人物で、落馬して脚を三カ所も骨折したときも、若い士官二人に支えられながらも自分の足で歩いて帰宅し、死ぬほどびっくりして駆け寄ってきたおばあちゃんに、「なんでもないよジェット。骨が少し壊れただけだ。」といったそうだ。

祖父より三十年ほど長生きしたおばあちゃんは、将校の未亡人であるが、同時に将校の娘でもあった。彼女は孫たちによく語って聞かせたのは、自分の母や兄弟姉妹と一緒に、彼女の父がベルギー蜂起の当時に要塞司令官をしていたライク[*2]から逃げ出したときの様子であった。おばあちゃん自身は、少し心配性であったが、考えられる限りでもっとも愛らしく、おしとやかでチャーミングな女性で、動作は機敏でいつもほがらかで、孫たちみんなにとって理想的な祖母であった。そして、お気に入りの孫であった私には、生涯の嵐のなかの頼みの綱であった。

---

*1 ブレダ要塞はオランダ独立戦争の重要な舞台の一つ。

*2 日本では、フランス＝ベルギー系のリエージュという呼び名の方がよく知られている。

母と祖母は、内面よりも外見の方が似ていなかったが、仲がよかった。

母は、父と同じく長身で、肩幅も広かった。若い頃は、スタイルがよく、すらっとして、性格の面では、何事にも毅然としつつ、気持ちを和らげることができる点を誇りにしていた。

母は、古典的な美の規範に収まるひとではなかった。顔の色はさほど生き生きとしたものではなかったし、顔だちも整っているとはいえなかった。しかし、めったにない魅力が母にはあった。心のこもった視線や声の調子や身振りによって、誰でも彼女のかわいらしさや親切さが伝わった。母の髪は黒っぽく、ウェーブがかかっていたが、持病の頭痛のために、昔から銀製のワイヤが編み込まれていた。額は高く広く、眼は大きく灰緑色で、口もとは形がよく、表情豊かであった。しかし、こうした乱暴な描き方では、母の希有な魅力や吸引力の本質を捉えることはできない。彼女の視線や声が示す無限に深い憧憬の本質を捉えることはできない。憧憬は渇望とは違う。両者は正反対である。憧憬には、眼差しのなかに、実現への信頼がある。愛情とは異なるものへの憧憬を、母は夫や子どもたちに示すことができた。それは、その萌芽を自分自身のなかに持ちながらも、自分だけでは行く手を見定めることのできない、より高貴な精神的存在への憧憬であった。

母も、レイデン大学刑法学教授のその兄弟も、どちらも非常に音楽好きであった。

母の手は、力強いのに細く、形のよい、まさにピアノのための手であり、母の声は、大きくはないがきわめて音楽的であった。きっとブレダにいた娘時代に、何度も音楽の演奏をしてきたのだと思う。そうでなければ、あれほどうまく楽譜を読むことはできないはずである。母は、高齢になるまで、少々指が硬くなったとはいえ、音楽の演奏を続けた。自分で演奏するが生涯の楽しみとなったのである。母からは、私は、最初の音楽教育を受けた。私は毎日三十分間ピアノを教わった。最初は指使いと音階、それから小曲かピアノ二重奏曲。母は厳しくて、一回でも間違うと、私は、その間違いに自分で気づくまでずっと演奏し続けねばならなかった。しかし、ついに間違いが分かったときには、私も意地になっていて、母が本当に腹を立てていなくなってしまうまで、わざと間違った音を出したりした。これで泣きながらのレッスンは終わった。

母は万端整った主婦であり、家政婦が行うあらゆる家事の模範を示した。朝、食事をしてから、母は、残り物があるかを確認したり、大きな桶からバターを掘り出すために、地下室に降りていく。春には、バターは固くて表面を水で洗わなければならないが、そうするとバターはおいしくなくなる。そこで父のようなひとにとっては、顧客の農民から、ヒナギクを咥えたつぶらな瞳の乳用羊を贈られることほど、喜ばしいことはなかった。

私のおじのひとりファン・デル・フーヴェンは、ラーペンブルフの、高い踏み段のある三階建ての大きな家に住んでいた。おじの妻は、その振る舞いからおのずと知れるように、子どもの頃にインドネシアで暮らしていた。彼女には四人の

息子 - そのうち一人は夭逝した - と一人の娘があった。おじは子どもたちを私たちよりもかなり早くから教育した。食卓ではいつも陽気で、子どもたちが同時におしゃべりしようとしたときだけ、おじは、「まずおまえが話しなさい、それからおまえだ。要するに順番に話しなさい。そうしないと何を言っている分からなくなる」といって間に入った。おじは、オランダにおける最初のワグネリアンのひとりであり、師であるワグナー作品の主要パートをピアノで演奏した。おじもおばも非常にお客好きであった。私も何回も泊まりに行った。そこで自由を、両親の家の厳格な規律からの逃避を満喫した。友人の裁判官の娘がハールレムからおじおばの家に泊まりに来たとき、おばが私に、前の晩から来て翌日の夕方に一緒に観劇に行かないかと訊いてきた。芝居は『オグロシギ』という正真正銘のメロドラマだった。*1 私はそれまで芝居を見たことがなかったので、家に帰っても興奮しっぱなしで、一睡もできなかった。女優になりたいという激しい願望に捉えられ、おおげさな身振りや抑揚を強調した口調で、『エルナニ』*2 の「ローマ、我が唯ひとつの復讐の対象」といった台詞や、主人公のエルナニが先祖の栄光を謳ったモノローグを朗読するほど楽しいことはなくなった。ハールレム劇場を知ったことが、生涯にわたる芝居好きへとつながっていったのである。

それがおじの家の庭の奥の方にあったのかどうかははっきりとはしないが、砂山があって、そこで私は何時間も遊んでいた記憶もある。湿った砂にトンネルを掘るということは、それが崩れないようにするところに技量が発揮されるわけであるが、私もそんな技量を磨いていた。

私はまた色々な貝殻も集めた。空想の中では、それらは、高価な陶磁器の素晴らしい破片であった。私はそれを小箱に入れて、誰にも盗られないように砂山に隠した。このように、女優になりたいというおおげさな夢と、子どもらしい遊びとが当時の私には混ざり合っていた。いずれにしろ、どちらも空想の世界のことなのだが。

私の父は、よく冗談で、家に仕事に来た職人の職名をラテン語風にして楽しんでいた。例えば、大工はホーゲンダミウスであり、絵師はファン・デル・メーリウスといった具合である。私は一度それを乱用して、当人がいるときにそのように呼んでしまい、いわれた当人がそれを父に訴えて、ひどく怒られたことがある。刑務所に入れられるかも知れないと思ったほどであった。

公証人としての父は、「村の旦那様」と呼ばれた L.St 伯爵と接触していた。伯爵とその妻は、冬はハーグの「お屋敷」（と私たちは呼んでいた）に住み、夏になると、いなかのノールドヴェイクに住んだ。伯爵夫妻が戻ってくるたびに、私の両親は伯爵夫妻を訪問し、夏の間に二回、伯爵夫妻は、両親を午餐会に招待した。そのときは私たち子どもも一緒だった。伯爵夫妻には子どもはなかったから

---

*1 オランダの劇作家 R.ファーセンの 1883 年の作品。

*2 ヴィクトール・ユーゴの 1829 年の戯曲。

である。正餐は退屈であったが、すぐに終わった。10 時半前には、両親と帰宅した。

ところで、私は成人しても、やりたいことが見つからなくて自問自答していた。ひとりで、「自分探し」をしなければならなかった。父と同じように、私も近くの喫茶店によく出かけたが、そこにいっても誰かいるわけではない。あなたなら小半時もすれば、店を出ようとするでしょう。伯爵夫人が、そんなあなたを少し見つめて、帽子を被りコートを着て手に手袋を握ったまま、店に入ってくる。

私たちは不作法に慣れているので、お互いを無視している。しかし、L. St. -W 伯爵夫人と同じくらい家格の高い私のいとこが、一度私と一緒に店にいたとき、伯爵夫人が入ってくるなり立ち上がり、手を伸ばしながら、こういったことがある。「失礼します、奥様。私がいるとおじゃまになると思いますので、別の日に見えられてはいかがでしょうか。」と。

子どもの頃の一番愉快な思い出は、母とスキダムに大おじを訪ねたときのものである。弟も少なくとも一度はこの件に関わっていることから考えて、私が六歳か七歳だったときのことである。

何日かスキダムを訪ねてくるよう招待が届くと、父がマールトおじさんとの仕事　のために同行しようとしまいと、母はとくに喜ぶわけではなかったが、私にはそれがいつも楽しみだった。子どもはつねに変化を必要とするものだし、スキダムの環境は、いまでもはっきりと記憶に刻み込まれているほど、特別だったからである。

マールト・レインベンデおじさんは、大きな醸造業者で、その会社は、いまでも、シモン・マースという名で存続している。おじは未婚の二人の姉妹、ミーチェおばさん、レッチェおばさんと一緒に暮らしていた。のちに聞いたところでは、二人は、家産を分割しないために、結婚しなかったそうである。

家の外側はよく覚えていないが、その正面は一見するとさほど個性的ではなかった。よく覚えているのは、居間と食堂の二つである。これらは事務所とともに一階部分をなしており、ミーチェおばさんとレッチェおばさんが、家事仕事がおわったときに、そこで熱心に編み物をしていた。居間と食堂には天井に沿って梁があり、黒っぽい壁にはダゲレオタイプ*1 が貼り付けてあった。これらの部屋の他には、下の方に小さな階段と半地下室があって、そこはベッチェが君臨する領地だった。食事の十五分まえになると、私はベッチェにくっついて半地下室にいき、ベッチェがデザート用の小皿を並べたり、魚の形をした木製のものを大きな塩入れに押し込んだりするのをよろこんで見ていた。

マールトおじさんのところには、三時半に朝食をとった。上流家庭の大半は五時か六時に朝食をとるのが普通だったが、おじさんのところは、もっと古風だっ

---

*1 ダゲレオタイプは、フランスのダゲールが発明した 19 世紀の実用的写真技法あるいは、その技法で作成された写真。

たのである。朝食と昼食の長い間隔を埋めるために、何度もコーヒーを飲んだ。そのときにはいろいろな焼き菓子が添えられていた。

一時から二時半のあいだに、マールトおじさんは工場か、自分が経営している孤児院から戻ってくる。それから、一杯のポルト酒かマデラ酒をとりに酒棚の方にいく。「焼き菓子も一緒にどう？」といわれても、「食べない。酒を試すだけだ」といいながら。昼食のときには、ぴかぴかに磨き上げられた保温器にのった温かい食事が給仕された。食事の全体が美しくしつらえられており、個々の料理も栄養豊富な精選されたものであった。マールト家には菜園もあったので、さっまざまなハーブの入ったサラダが、いつも食事に添えられていた。デザートは、普通はクレープを丸めたものが、銘々に給仕された。

食事時間はかなり長かった。その後、私は庭で少し遊んだ。庭のことははっきりと覚えているわけではないが、小道でうまく区切られていて、ステンドグラスのある東屋にチューリップが植えられていた。東屋の向かい側には堀があり、その後ろから牧草地が始まっていた。そこでは、早春にはまだ若かった雌牛たちも、夏には寝そべりながら反芻を繰り返し、搾乳が必要になると突然に鳴いたりしていた。

ノールドヴェイクではそんなに牛が集まっているのを見たことがなかったので、もう寝なさいと呼びに来るまで、何度も牛を見にいっていた。

こんなに楽しいことは子どもにはない。家に帰っても、私は何度も牛を見たい、牛をみたいと歌った。だからスキダムは本当に楽しかった。そこには羽布団もあった。そこに倒れ込めば、深くて柔らかい縦穴のなかにいるような感じがした。母がとうとう止めさせるまで、柔らかくて深いところに落ちるのがおもしろくて、何度も羽布団に飛び込んだ。

私たちがスキダムにいるときは、おじは、いつも午前中に、私たちをまずは工場に、それから孤児院に連れて行った。おじは、自称の通り、「股裂き」状態で仕事をしており、移動には馬車を使っていた。汽車には乗ったことがなかった。工場のことで漠然と覚えているのは、労働者たちのさえないやせこけた顔である。全員がアルコール漬けであった。それで、おそらく週給が６～７ギルダーである。スキダムの住民は、オランダでもっとも堕落した人々である。

おじも、ジェネバー・ジンを念入りに試飲はするが、飲んでもすぐに吐き出していた。飲み続けると胃の健康が脅かされるからである。

工場を訪れた後は、普段は、孤児院に向かう。マールトおじさんは、重たい鎖のついた大きな鍵束をじゃらじゃらと鳴らす。そうすると門が開いて、私たちは中庭に入る。子どもたちが、もちろん何ともいえない奇妙な服を着て、自分たちの「父親」に挨拶するために外に出てきて、甲高い声で歓迎の歌を聴かせてくれる。「私には子どもはいないが、孤児はみんな私の本当の子どもだ」と、マールトおじさんは馬車のなかでいっていた。おじはおじなりのやり方で、これを善行と考えていたのである。ところでその子どもたちは、受けるべき職業教育を受け

ていたのだろうか？多くの者は、工場で働くことになる。女の子の場合であれば、もちろん、使用人かお針子に育てられる。

これで私のスキダム訪問は終わった。マールトおじさんは、手に持った 10 ギルダー金貨を母にこっそり渡し、私には一袋の砂糖菓子をくれた。マールトおじさんは、孤児院の子どもたちが結婚するたびにこの 10 ギルダー金貨を贈り、姪や甥のためにも、それを貯めていた。

第 2 節寄宿女学校の頃

オーステルヴォルデの最初の印象は、よく思い出せないが、知らない娘たちに囲まれて、孤独で居心地が悪く感じていたようである。そして無意識のうちに、快適で趣味のよい実家と、これから暮らすことになる、みすぼらしく陰気な周りの様子との差を感じ取っていたのかもしれない。

寄宿舎は四階建ての大きな建物で、一連の細長い部屋が続いており、そこで女生徒が放課後を過ごすことになる。宿題を終えたら、終えた生徒の名前が読み上げられ、その生徒は、手芸などをすることができる。誕生日を迎えた生徒がいれば、その生徒はタルトとお茶のもてなしを受けた。村の通学生を除いても、二十人以上の、年によっては二十五人以上の女生徒がいたが、その全員が一度はもてなしを受けた。

私の記憶のなかでは、私たちが放課後を過ごす寄宿舎の部屋は、居心地悪さの典型であった。部屋には長い机があり、机の右に椅子がある。どの部屋にも、花束も鉢植えの花もなかった。壁には壁掛けもなかった。快適な居場所は部屋のどこにもなかった。

共同寝室は、精神病院的性格がもっとひどかった。オーステルヴォルデで二三年過ごした女生徒は、個室か二人部屋に入り、そこをできるだけ居心地よいものにすることができたが、四五人が寝る共同寝室は兵舎のようで、暖房もなく、厳しい冬には本当に寒かった。

私は飢えたことはなかったので、それだけ一層寒さはこたえた。オーステルヴォルデほどの寒さは、のちにも経験したことはないほどのものであった。他に、食堂、女性の校長先生の M 博士の部屋、同じく女性で教頭先生の Schw.の部屋、副教頭・家政婦の部屋を含むこの建物は、ガラス製の通路で校舎とつながっていた。校舎の方は、非常に温かかった。大きな石炭自給式ストーブがあったからである。私たちは、十一時半に受け取るバター付きパンを編み針を利用して、このストーブで焼いた。しかし、通路はシベリアみたいなもので、私たちが校長先生の誕生日に上演する芝居のリハーサルを夕方行っていたホールも、それに劣らず寒かった。リハーサルのときにはほとんどの女生徒が手袋とブーツを履いていた。

私たちが持っていかなければならないものに、ショールがあった。寄宿舎から校舎までの通路でまとうためである。それは、灰緑色と黒のタータンチェックの

もので、ウールの質がよかったので、いまでもある。

生徒の大半は大都会の出身で、自分をもう淑女だと思いこんでいた。彼女たちは、よくアイロンのかかったリボンで、髪を頭の上の方でまとめていた。私のように髪をお下げにしているのは、彼女たちには「田舎者の典型」に映った。

私だけではなかったが、彼女たちは、そんな髪型を馬鹿にした。彼女たちは、私のことを、どうにもならない子で、めちゃくちゃ学者ぶっていると思っていやようである。私は、クラスの子たちが間違って解釈しているその言いがかりに、気づかないふりをしていたが、たしかに学者ぶっていなかったわけではない。例えば、私たちがシラーの物語詩の対句を教わったときには、私は、まず詩の全体を内側から学ぶことが大事だと分かったので、その課題を一番の成績で果たした。たしかに記憶力は抜群で、覚え間違えたときは、肩をすくめて、「美しい言葉よ、逃げないで」とつぶやいたりした。こんなことをいうくらいだから、「学者ぶってる」といったレッテルを張られたのだ。

しかし、結局のところ、これは取るに足らない出来事であり、私があとから親しくなったかわいくて賢い同級生たちは、私が記憶力や博識を鼻にかけないように注意してくれた。彼女たちこそ、この二つの点で、私を上回っていたのである。

私は、ほとんどすべての生徒と調子が合わなかった。それは実家にいたときと変わらない。私は現実から離れて、ロマンチックな夢のなかに入る。そうして私が何でもを完全に信じ込むことに気づくと、女生徒たちは、それをからかってやろうと決めた。彼女たちは、自分たちが秘密結社に入っていると嘘をいい、私にも仲間になるようにいった。それは確かに、私にうってつけだった。次の土曜日の夜に結社の秘儀を授かることになった。「目隠しをして待っていなさい。道は案内人が知っている。一時間ほどたてば、仲間たちのところに着く。我々は、暗くなるまでは、そこに戻ってはこないのだ。」これは本当におもしろそうだった。土曜日の夜になったとき、私は期待で胸がどきどきした。副教頭が気づかず、町中が寝静まっているあいだに、気がつくと突然仲間が暗闇から現れればよいのに、と。目隠しの旅が始まってから、私は何度も階段を上り下りしたように思う。しかし、そんなことでは、信じる気持ちがぐらつかなかった。旅はほぼ一時間続いた。とうとう、「われわれはここだ」という声がした。目隠しを取ると、私がいたのは、・・・物干し用の屋根裏部屋だった。一ダースほどの女生徒が、私を取り囲んで、愉快そうに大声で笑っていた。

私も、この賢い一味と一緒になって笑った。

もう一つの出来事は、もっと愉快だったろう。ヴェルプから一時間以上離れた美しい森の中にあるローゼンダールの大邸宅ケルフホーフェには、デ・ヘネステット[*1]の墓があった。いたずら者のひとりが、この詩人の命日にはたくさんの少

---

*1 ペトルス・アウグストゥス・デ・ヘネステット（1829 ～ 1861 年）は、オランダの詩人にして神学者。

女がお墓まで巡礼し、詩才のある者は夭逝したこの詩人のために詩を作り、その中で一番だと見なされた詩は、彼の墓に捧げられるこことになっている、と私に説明してくれた。それを聞いた途端、私に火がついた。これこそが、寄宿女学校在学中に他の女生徒と実行すべきことだと。土曜の午後の自由時間に、私は隠れて、デ・ヘネステットの二行連句を二三時間かけて熱心に学んだ。それは、このうえなく、情感的なものであった。その日の夜には詩が朗読され、日曜日には年に一度の巡礼の旅が始まることになった。

共謀した仲間のひとりが、デ・ヘネステットのためにテル・ハール*1 の連句を朗読した。私は、それがテル・ハールのものだとは知らず、ただ素晴らしい詩だと思っていた。私の趣味がまだ磨かれていなかったからである。「どうしてこんな詩を作れるの！」と私は驚いて叫び、「私のよりずっといいわ」と続けた。しかし、私の詩を朗読すると、今度は彼女たちがびっくりする番となった。「今日、それを自分で作ったの？」と、彼女たちは訊いたが、もちろん私の答えはイエスであった。

次は、とうとう、神秘に彩られた正真正銘の皮肉屋 B.v.d.H の番であった。彼女は、まじめな顔つきで、一本の糸に捕まって天国に上る詩人の死を祝祷する頌歌を、詩人のために朗読した。笑い声は、まだ収まっていなかったが、私はむしろ、その詩を楽しんで聞いていた。しかし、またからかわれたのだと気づくと、幻想から醒めた苦々しさから、怒りに震える声でこういった。「ジュリー、あなたは本当に冷静で、現実的ね！」爆笑が耳に響いているあいだに、私は走り去って、思いっきり泣いた。

こんなに泣き叫ぶのは変だとは、何度も思った。「本当じゃないのよ、スカーク」‐私たちは、よくお互いを姓で呼び合った‐「私たちはみんな、冷静で現実的なの。」たしかに、大部分生徒はそうであった。もちろん、彼女たちに、両親や兄弟姉妹に対する愛情といった感情が欠けているわけではなかった。おそらく、大部分の生徒は、日常生活の現実の方をより愛していたのだろう。しかし、例外があるにしろ彼女たちに欠けていたのは、物事の崇高さや神聖さに対する意識、すなわち、*敬意を払う能力*である。この能力を神は私に贈ってくれたのである。この力こそが、あらゆるより高貴な生活を可能にするのである。

この二回目の期待はずれは、一回目のものより私を深く傷つけた。私は、幸運にも絶対的というわけではなかったが、十四歳にもならない少女には耐え難いほどの孤独に陥った。

それには、他の不都合な要素も関わっていた。寒さ、実家に比べて少ない栄養、新鮮な空気と運動の不足である。その結果、復活祭の休暇にしょんぼりと家に帰ることになった。私は、神経性の咳、不眠、食欲不振を患っていた。

---

*1 ベルナルド・テル・ハール（1806 ～ 1880 年）は、オランダの神学者で詩人。教会改革史や共産主義に関する著作もある。

休暇が終わっても学校に戻れないことが明らかになると、聡明な母は大胆な決断を下した。母は、アムステルダムの看護施設に新しく女性の院長が着任したこと、この才媛の評判が高いことを聞いていた。母は、私のことで彼女に手紙を書き、私を引き受けるという返事をもらった。その翌日、母は私をアムステルダムに連れて行った。

女性看護人の v.d.S.と話をしてから、ひとりで飾り気のない小部屋にいると、孤独感が押し寄せてきた。看護人はすぐに私の状態がさほど悪くないのが分かって、すぐによくなりますよと、励ますようにいった。

彼女の予言は当たった。私に必要なのは、自分自身を取り戻させることであった。彼女はそれを見事にやった。彼女は、私にすてきな物語を語ってくれ、定期的に診察している初期の入院患者のところに、毎日私を一緒に連れて行った。そうした患者たちのなかには貧しい者もいれば、深刻な悩みを抱えて彼女に助言を求める者もいた。彼女は、そうした患者たちの生活について説明してくれて、患者たちに敬意を抱くことの意義を私に教えてくれた。

数週間後には回復して家に戻った。数日後、校長先生のM博士が話をしたいという父に付き添われた、オーステルヴォルデに向かった。

オーステルヴォルデの柵のところまで来たとき、校庭では、女生徒の一団がテニスをするところであった。彼女たちは、「ねえ、スカークちゃんが戻ってきたわ。こんにちはスカーク」と親切に挨拶してくれた。私も挨拶を返した。父は、私が別の共同寝室を使うことを校長と約束していた。以前の共同寝室の生徒たちは私の負担にならないわけではなかたし、もうひとつの共同寝室の生徒たちの方が私に親切だったからである。彼女たちも私が病気だったことを聞いており、私に対する最初の態度を後悔しているらしかったからである。私の方は、以前よりうまくやれて、何人かの生徒とは少しずつ友達になっていった。

さて、いよいよ、校長、教頭の Schw.女史、副教頭および、私ともっともつきあいのあった女生徒たちについて語ろう。

校長のM博士はザクセン出身で、ひどいザクセン訛りのドイツ語を話した。彼女が自分の大きな犬に向かって、「メルケレかわいい」といっても、その声はあまりかわいくは響かなかった。彼女の最上の個性は、ユーモア感覚であって、これは寄宿女学校では貴重な個性であった。彼女は、感傷的な物事を嗅ぎつけると、無慈悲な嘲笑とともに、それを頭の中に封じ込める。彼女は本当に短気で、不公平であった。これから、彼女に固有の不公平についての論証し、その奇妙な不公平さにいかに彼女が執着していたのかを明らかにしよう。

彼女は、入学した最初の年には、大半の生徒を馬鹿にし、その自尊心をくじく。そうなってしまえば、彼女は生徒の手を出さないのだが、彼女には我慢ならない何人かの風変わりな子は、ずっと馬鹿にされ、自尊心を傷つけられるのである。

教頭の Schw.先生は、校長先生よりはるかに背が高く、男性並みの身長があった。彼女はきわめて洗練されていて、「まさにレディー」であった。彼女は愛ら

しく音楽的な声をしており、振る舞いも感じのよいものであった。彼女の個室は、建物の中でもっともい居心地のよいもので、沢山の写真と有名な画家の作品の何レプリカが何枚か壁に飾ってあった。ちょっと体調が悪いときには、その部屋にいって、ドイツの古典が並んでいる書架から本を取り出して読んでいてもよかった。先生は、私たちに、『オレルアンの少女』、『ウィリアム・テル』、『ドン・カルロス』などのドイツの戯曲を読んでくれた。記事を読みたいと思えば、やはり先生が、何種類かの新聞を読んでくれた。彼女の朗読は素晴らしかったが、好きな場面では、しばらく、彼女は読み進めることができなくなる。そのときは、眼鏡を外し、曇ったレンズをきれいにしてから、ため息をつきながら、「ごめんなさい。今日もまたしくじりました。」といった。*1

副教頭は、イギリス人のC夫人で、非常に慕われていた。女生徒たちと手をつなぎながら、彼女は、豊かなイギリスの戯曲や叙情詩の一部を上手に朗読してくれたり、私たちと一緒に朗読したりした。このようにして、私はシェークスピアの戯曲やコールリッジ、ワーズワース、キーツ、シェリー、ロセッティの詩を教わった。C夫人からは、英会話と英作文もかなり習った。

それに対して、私のフランス語は急速に衰えた。多くの生徒のフランス語会話が下手で、あっというまに彼女たちの間違いがうつってしまったのである。私のフランス語に副教頭が顔をしかめていた頃、フランス語をひどく固いアクセントで発音するイタリア人がやってきた。しかし、自分たちが申し立てた通りに、彼女からは、週に一度イタリア語を習うことができた。私がのちに自力でダンテの作品を読めたのも、ここで十分に習ったおかげである。

オランダ人の副教頭B夫人は、生涯につきあうことになった女性のなかでもっとも愚かであった。彼女からは、オランダ語、オランダ史、地理、算数、物理の授業を受けた。クラスで一番利口なマリー・Pは、アムステルダムで長い間十分な教育を受けていたので、B夫人よりも算数ができたし、B夫人が間違うたびに、性格に夫人を追い詰めた。オランダ語の時間には、まだはっきりと覚えているが、授業は全く何もされなかった。

物理の授業では、私たちは、冬に二週間、馬車で一緒にアルネムに通った。一般向けの物理学の講演に出席するためである。私は何も分からなかった。それでも緊張して聴講しようとすれば、長い一日の終わりには、あなたが私なら、きっと眠たくなるはずである。そして、オーステルヴォルデの食堂にすわり、温かいお茶を　飲んで、バター付きパンを「たいらげた」ときに、やっと元気になるはずである。

私たちは、講演のメモを取り、それをレポートに仕上げねばならなかった。それはうまくはできなかった。そして、B夫人から先に説明を受けていたとしても、

---

*1 原文はオランダ語ではなくドイツ語で、Ach Kinder, was bin ich heute wieder dumm.である。

それで分かるのは、彼女もさほど利口ではないということだけであった。

そのほかに、音楽の先生がいたが、あまりよく覚えていない。手芸のうまい女教師もいて、彼女は、アムステルダム弁が丸出しであった。しかし、Sch.夫人は災いの種ではなく、よい授業をしてくれた。彼女からは、上手な繕い方、丸く折り返す方法や、もう忘れてしまったが、そのほかにもいろいろなことを教わった。先生の授業では、クリスマスの前には、手作りのスリッパや袋物のような手芸品をもってこなければならなかった。それは、両親や友達にプレゼントすることになっていたが、Sch.夫人は喜んで手伝ってくれた。

最後に、宗教を教えてくれた牧師とダンスの先生について一言。牧師は、近代的な傾向のある年老いた名誉教授であったが、授業で覚えていることは、きわめて否定的なものであった。彼は、聖書についてほとんど教えてはくれなかったのである。

その結果、私たちには二つの偉大な真理が、オランダ人が美への渇望を学びとるフォンデル*1 と、生活上の道徳的な理想主義を引き出す聖書とが、欠けたままになったのである。

私も、卒業するとき、試験に合格したいと思った。レイデンでレモンストラント派*2 のチャプレンをしていたベイエルマン博士が、のちに博士が語ったところでは、そのための用意をしてくれた。それは、自分の信仰に関する作文を書いて、博士に提出することであった。それを届けに行ったとき、博士は結構といってくれたが、ただ私は、その際に、聖書、教会、信仰の偉大な先駆者たちの権威を基本的に受け入れるということを、忘れていた。しかも、忘れていたかもしれないということさえ、分からなかった。

ダンスの先生は、もちろんドイツ人であったが、火曜日の夕方にヴァイオリンをもって学校にやってきた。私たちは、夕食が終わると、部屋に戻って身なりを整え、ダンスシューズを履いた。これは、それだけで楽しいことであった。ほかの日といえば、許可がなければ、寝室に行くこともできなかったのだから。

ほとんどすべての生徒が、ダンスをうまく踊れた。ただ私だけは、家ではダンスらしきものに触れたことがなく、子どものパーティでも踊ったことがなかった。しかし、私はすぐにダンスを覚えた。とくに、ゆらゆらとしたワルツは、素敵だと思った。ワルツが終わり、息も絶え絶えになって、めまいがしたように椅子に崩れ落ちるとき、一種の酩酊感が訪れるのである。

校長先生の誕生日を祝う年に一度のお祭りのときには、最初に、ちょっとした

---

*1 ヨースト・ファン・デン・フォンデル（1587 ～ 1679 年）は、共和国時代のオランダの作家で、プロテスタントからカトリックに改宗した人物。宗教的寛容を主張した人物としても有名。肖像がオランダの紙幣に使われたこともある。

*2 レモンストラント派とは、アルミニウスの主張を受け継ぐ反改革派教会のグループである。

芝居が上演され、それから、仮装舞踏会が始まる。そこにはＯＧもよくやってきた。男性も、女生徒の兄弟もやってきて、私たちは真夜中まで踊った。

衣装は、みんなが一生懸命に作った。趣味のよい、よく考え抜かれたものができた。私自身も、一度、ハーメルンの笛吹男の衣装を着たことがあった。（続く）